

遠藤周作と私～愛とユーモアとペーソス

なぜか、遠藤周作が好きである。どの作品を読んでも、心に沁みる。グッと来るものがある。

何がそうさせるのか、よく考えるが、一つは弱さへのまなざし方にあるように思う。

そのまなざし方は、たとえば、『沈黙』のキチジローに集約される。どうしようもない弱さやずるさに困ったなあと思いつつも、突き放さないで受けとめる。そのやさしさと諦念。そこに滲みでる、あるいは溢れでる神の愛のなみだ。弱さを受け容れるしなやかでしぶとい勁さ。

もう一つは、ユーモアとそこはかとなないペーソス。弱さを受け容れることができるためには、愛だけでなく、ユーモアも必要だ。

ユーモアには、すき間がある。余計なものも含めて、さまざまなものを受け止め、受け入れ、居場所を生み出す力がある。ユーモアには、愛の変容という一面があるのだ。時には、まっすぐな愛はうとうしいだけだが、そこにユーモアがまじると、まあいいか、とか、いいかな？ いいかも？ という余裕が生まれる。

ユーモアは間口を広げてくれるのだ。たしかに、愛も間口を広げてくれる。が、それは時に押しつけがましい。正義派ぶる。正当性を主張する。その自信過剰な絶対根拠のような圧力に押しつぶされそうになった時、ユーモアは風を入れてくれる。窮屈を解除してくれる。まあいいか、というすき間を作ってくれる。

遠藤周作のユーモア文学には、そのような肩の凝らない救いがある。

そして、大事なことは、そこにペーソスが生まれるのだ。ペーソスは、英語読みで、もともとはギリシャ語の「パトス (pathos)」を語源としている。そのパトスには、情熱とか情念という訳語も与えられるが、受苦とか受難の意味もある。そして、ラテン語の *passio* から英語やフランス語の *passion* (情熱) や *patience* (忍耐) に派生する。そして、*patience* は *patient* (忍耐強い者＝患者) という語と連関する。

このパトス～パッシオ～パッション～ペーソス～ペイシャントの流れを、遠藤文学はカバーしている。そのペーソスの力にしんみりと悲しくなりながらも救われる。

もちろん、その根底には、「神＝たまねぎ (『深い河』の表現)」が居る。でも、あえて、「神」と呼ばず、「たまねぎ」と呼ぶユーモアとペーソスが愛を拡大加熱する余白をつくるのだ。その暑苦しくないあつたかさ。

遠藤周作は、小学生のころ、「シュ ッ、マ ッ チ。 ポ ッ、ケ ム リ。 タ バ コ、ノ ミ タ イ ナ。」という「詩」をつくり、大連の新聞の少年文芸欄に掲載された。三つ子の魂百まで、その詩にこめられたユーモアとペーソスとそこはかとなない愛のまなざしに私は惹かれるのである。